

郷土の 偉人

日本の石膏ボード産業の基礎を築いた 須藤 永次

須藤永次は明治 17 年、宮内に生まれました。宮内小学校高等科を卒業後、荒砥町の織物問屋大友商店に勤め、商人としての基礎をたたき込まれた永次は、やがて蚕糸業仲買商として独立し、石炭商、製紙業にも進出しました。

大正 7 年、吉野石膏製造所を作り、「石膏壁板（石膏ボード）」の製造販売を始めました。同 12 年の関東大震災後、「ボード壁の住宅は住みよく燃えない」と大当たりしましたが、昭和 4 年からの世界恐慌で「頼まれ社長」をしていた製糸会社が破綻し、その連鎖で須藤永次商店も倒産しました。

しかし、耐火性の石膏ボードには将来性があるという永次の信念は揺るがず、永次は多角経営をやめて石膏ボードに専念することとし、昭和 10 年、会社を東京に移して吉野石膏株式会社を立ち上げました。その後、日中戦争の拡大と共にボードの販路も拡大しましたが、太平洋戦争により従業員も物資も不足し、休業状態になりました。

昭和 20 年 10 月、工場を再開し、機械の整備などに取り組みますが、永次はここで一大決心をします。それは、「競争と量産なくして繁栄なし!」、「相携え相競うて」繁栄しようと提唱、他社にボードの技術を公開指導したのです。永次は自分のことだけでなく石膏業界全体のことを考えていたのですね。



●採掘した原石をトラックで貯鋳場へ（昭和 5 年）

昭和 25 年頃からアメリカ軍や自衛隊の特需、東京都や横浜市
の住宅需要でボード業界は活況を呈しますが、永次はそれに安住することなく技術向上に励みました。

永次は東京で成功しましたが、郷土のことも忘れませんでした。正徳寺・宝積坊・熊野講堂・長谷観音の改築や環境整備、双松公園の環境整備、青少年婦人団体や育英資金に、るい夫人と共に多額の援助をしています。

このような功績に対し、昭和 29 年紺綬褒賞（育英事業）、同 30 年藍綬褒賞（産業功労）が贈られ、同 39 年死去に際しては従五位勲五等双光旭日賞が贈られました。

吉野石膏株式会社はその後も発展をつづけ、二代目社長須藤恒雄も、市内福祉事業に、宮内小・中・高の環境整備その他に多額の援助をされ、市の名誉市民に推されています。

文・須崎寛二

平成 24 年 12 月 1 日号 市報なんよう掲載

